

Title	ポルトガル語辞典校訂に協力して：いささかの反省と雑感
Author(s)	岸和田, 仁
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81433
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Ⅲ. 社会課題に向き合う 良人たち

ポルトガル語辞典校訂に協力して — いささかの反省と雑感

情報誌『ブラジル特報』編集人

岸和田仁

1. 自己紹介をざっくりと

大学（東京外国語大学）を卒業したのは1976年であったが、学生時代に何をやっていたか、となるとお恥ずかしい思い出ばかりだ。大学の中南米研究会のメンバーとして関心があったのはインカやマヤの古代文明やハイチ独立革命で、怪しげな論文もどきを書いたり、ブラジル関連では古本屋でアンドウ・ゼンパチ『ブラジル史』（河出書房版）を見つけて夢中になって読んだり、当時翻訳もなかったA・G・フランクの従属論集の英文原書を紀伊國屋書店で見つけて熟読したりしていた。3年生になってからは、アバルトヘイト反対の市民運動にコミットするようになったので、モザンビーク独立宣言を和訳したり、ギニア・ビサウの独立闘争を指導したアミルカル・カブラルの論文集の翻訳をお手伝いしたりした（これは後に共訳でA・カブラル『アフリカ革命と文化』亜紀書房として出版）。4年生の時は、毎週木曜日は早起きして東京大学（本郷）で出張講義されていた犬養一郎教授の「アフリカ経済論」を毎回欠かさず最前列で盗聴するようになったが、講義の後の赤門前の喫茶店ルオーにおける、犬養先生を囲む会は実質的な犬養ゼミとなって、ここで受けた様々な知的刺激は今でも記憶に新しい。

また、当時岩波版『ブラジル史』を執筆中であったアンドウ・ゼンパチ（安藤潔）さん（広島出身、東京外語ポルトガル語科第一期卒業、ブラジルでは邦字紙編集長、サンパウロ人文研研究員など文筆活動で活躍、晩年は広島に帰国）を訪ねたこともあった。サンパウロ州の市場経済成長史を核としたブラジル近代史叙述をやっているんだ、と書き込まれた原稿用紙を見せていただいたが、生意気な学生であった私は、アンドウ史観のベースとなる大塚（久雄）史学やカイオ・プラードの経済史を巡って、批判的な議論を吹っ掛けてしまった。若気の至りとはいえ、大変失礼なふるまいをしたと今頃になって反省している。

卒業・就職となって、自分の進路について改めて考え込んだが、自分の能力を勘案すれば、

アカデミズムの世界にいくべきではないと判断し、第一希望の出版編集者の道を目指したが、複数受験した出版社はいずれも、筆記試験、一次面接は通るのだが最終面接で落ちてしまい、あえなく挫折。やむなく第二の選択肢として、ブラジル駐在となる可能性のある企業を“物色”し、二社から内定をもらうことができた。コンピュータ最大手か食品企業か、と悩んだが、食品企業に入ればノルデスチ（ブラジル北東部）に駐在できるかも、と勝手に期待してこちらを選んだ。

というような消去法で入社した、デモシカ会社員だったが、幸いなことに入社3年目でブラジル現地法人出向の辞令をもらい、1979年にはブラジルに着任できた。主な仕事は水産加工関連や熱帯果実加工の開発・営業（日本初アセロラドリンク含む）で、駐在員として生活した場所（都市）は、レシーフェ、ジョアン・ペッソア、サンパウロ、ペトロリーナなど、期間としては3回の駐在（一回目1979年～1995年、二回目2006年～2009年、三回目2012年～2014年）で、のべ21年間ブラジルで暮らすことになった。

熱帯乾燥地帯での灌漑農業分野において南米では最大の成功事例との評価が確立している、サンフランシスコ河中流域の灌漑農業フロンティアでの熱帯果実加工事業の現場責任者を仰せつかったものの、その初期段階では随分と蹉跌を重ねてしまった。とはいえ、工場竣工（1992年）から30年近く経過した現在、この事業を振り返ってみると、結果として、契約農家―集荷・加工―販売、というインテグレーション体制が確立され、今はやりのESG事業として地域社会に根付いた企業活動に育っており、この事業確立のファクトは自負してもよいだろう、と思えるようになった。

そんな実業の世界での生業（＝企業駐在員）と並行して熱中したのが週末ライター（もどき）の仕事であった。

月刊誌向け文化短信、インタビュー記事（ミュージシャンや映画監督）、歴史紀行、書評などを担当したが、文章を書くためには当然ながら文献やら新聞雑誌やらを熟読せねばならず、その結果、読書の対象が元々の自分の守備範囲を超えて広がり、この学習効果は新たな視点の獲得に繋がる、とプラスの循環をもたらしてくれた。（この辺をまとめて一冊にしたのが『熱帯の多人種主義社会 ブラジル文化讃歌』[つげ書房新社、2005年]だった）

こうした“清く正しい駐在員生活+週末ライター業務”という“二重”体験のおかげでブラジルの事情全般（生活情報から経済・文化事情まで）やポルトガル語にいささか詳しくなったが、大国ブラジルの北から南まで出張してあちこちの現地食文化を楽しんだこと、すなわ

ち“胃袋の満足度”のほうが“知的満足度”よりも高かった，というのが実態だった。

その間、多くのブラジル人と知り合い、様々な会話を交わすことになったが、移民大国だけあって、私自身が直接会った人たちに限定しても、彼らのルーツは、ユダヤ系、レバノン系、アルメニア系、バスク系、ハンガリー系、ポーランド系、スペイン系、ドイツ系、イタリア系、日系、中国系、韓国系という感じで、世界中から移民を受け入れたブラジルであったからこそその経験となった。彼らの移民ファミリー史の背景を聞くと、まさに近代世界史の一部というか一環であることを学習することになって、歴史とはE・H・カーのいう「過去と現在の対話」というよりも、ブラジル人たちの有り様そのものが歴史じゃないか、と実感する貴重な経験を重ねることとなった。

というようなブラジル経験を持つとはいえ、今では単なる定年退職者でしかない小生に対して、プログレッシブポルトガル語辞典に協力せよ、とのお話がきたのは、林田教授の”思し召し”があったからだろう。そんな経緯から、全くの素人が、辞書作りという“戦線”に参加することになった次第である。

2. 膨大な量のゲラ刷に悪戦苦闘

怪しげな記憶に頼ると、同辞典の編集責任者（小学館の中井さん）から最初の連絡をいただいたのは、2014年の11月頃だったか。経済用語や経営関連語をケアしてほしい、という話から始まったが、結局は、初校ゲラ全ページに目を通してチェックする、という話に発展し、それを安請け合いしてしまったのが運の尽きだった。その時は、それがどれだけへビーな作業なのか、想像すらできていなかったからだ。拡大プリントアウトされた初校ゲラの山が宅配便で何回かに分けて送られてきたが、2015年1月から4月まで、のべ4か月かけて、その紙の山を崩していくことになった。ゲラを斜め読みすればいいだろう、くらいの軽い気持ちで始めたのだが、誤記・変換ミスばかりか初歩的な間違いを“次々と発見”することになったのは全くの想定外であった。この作業の凄まじさは今思い出してもシンドかった。

2015年2月上旬、三重県関連の公益財団法人から依頼されて、環境技術FS調査で10日ほどブラジル・サンパウロへ出かけたが、その時は、かなりの枚数のゲラの束を手提げ鞆に突っ込むことに、なんとも、機中や乗り継ぎ中継地（ドバイ）でもサンパウロのホテルでも

赤ボールペンを片手にゲラのチェックをすることになってしまった。2015年の第一四半期は、ほぼ毎日3~4時間くらいは辞典のゲラをチェックして訂正文を赤ボールペンで書き込む作業に費やしていた。

そんな辞書校訂協力の作業を通じて感じたこと、学んだことを雑感としてメモしてみよう。

■ 雑感その一：ブラジル生活者がよく使う魚名が不完全

企業駐在であれ留学であれ、ブラジルで生活するとなれば、毎日の衣食住で使う生活用語をまず覚える必要があり、わからねば辞書で調べるのが、最初の必須作業だ。なかでも食べ物の単語、特に魚の名前は必要なりに辞書になかったりするものだ。

わかりやすい一例をあげると、anchova。サンパウロの日本食堂で焼き魚定食をたのんだら、まずこの魚だ。チリ産サーモンの輸入などなかった1980年代以前は、日系移民は、お正月になると、この魚を塩蔵して新巻き鮭の代用として大事に扱ったので、「マス」と呼んでいた。ところが、これまでの辞書ではポ和辞典（白水社辞典も）でアンチョビー、ポ英辞典でanchovyと誤記されたままだった。アンチョビーとはカタクチイワシ（ポ語ではanchovetaという）であり、anchovaとは全く別種なのに、歴代の辞書執筆者は、先人の過ちのコピペを繰り返しており、プログレッシブ辞典のゲラも、“正しく間違っ”アンチョビーとなっていた。タメ息をつきながら、「アンショーバ、マスに似たニシン目の魚」と赤ペンを入れさせていただいた。

もう一例あげると、白身魚の代表といえるスズキ（英名 seabass ないし snook）は、南部ではrobalo、バイーア以北では（トゥピー語起源の）camurimで、いずれも頻繁に使われるが、このプログレッシブ辞典では未掲載だ。Pituも同様だ。北東部では淡水産手長エビを指す（大手カシャッサ企業名も）が、サンパウロでは深海性手長エビ（英名 scampi 和名アカザエビ）をpituと呼んでいる。海鮮料理ではブラジル各地でよく使われるのがpituだが、これも何故か採用されていない。

■ 雑感その2：経済記事に頻出する基礎用語の不備

二例のみ挙げてみたい。新聞記事、特に経済関係や農業関係で頻繁に出てくる単語に *insumos*(複数形)がある。単数形では、投入(量)の意味だが、複数形では、「原材料」の意味だ。農業でいったら、種もみ+肥料(+農薬)のことを意味する。これは赤ペン入れたはずなのだが、どうやらカットされてしまった。

あるいは *custeio*、従来の辞書では、支出、出費、としか記されていなかったが、農業経済で頻繁に使われる時の意味は「営農費」のことだ。この赤ペン追記は採用されている。

■ 雑感その3：基礎単語の語源ないし最低限の歴史背景の説明がほしい

2006年11月 UNICAMP(カンピーナス州立大学)で行われた国際シンポ「アフリカ・ブラジル：ポルトガル語が歩んだ道筋」では実に興味深い発表がいくつも行われたが、歴史学者ルイス・フェリッペ・デ・アレンカストロによる皮切り講演「アフリカ人とブラジルにおけるアフリカ諸言語」は特に刺激的な論稿となっている。彼によれば、(現在は首都ブラジリアの住民を意味する) *brasiliense* とは、16世紀から18世紀前半ごろまでは、先住民インディオを意味していたし、*brasileiro* とは、ブラジル史において最初の経済商材であったパウ・ブラジル(染料用ブラジル蘇芳)の集荷人のことを指していたのであり、ブラジル人という意味で初めて史料に登場するのは1706年でしかない。つまり、18世紀までは広大なブラジルでは分散した各地域が点として存在していただけだったが、ミナスにおける金鉱の開発が進み、労働力(黒人奴隷)も植民地国内市場も地域間交流が頻繁となるにつれ、地域限定から国全体への視点・概念が生まれ、ブラジルという国としての認識が出来上がり、*brasileiro*=ブラジル人となったのだ。

こうした *brasileiro* のような基礎単語には、語源についての最低限の説明が付されるべきだと考えるが、如何だろうか。

■ 雑感その4：地理用語の定義

ノルデスチ（北東部）の地理（教科書）で、必ず出てくるのが、zona de mata(沿岸部季節林地帯)、agreste（内陸部の中間地帯）、sertão(奥地乾燥地帯)の三区分別であるが、agresteについては、従来「荒地」というような訳語が当てられていた。白水社辞典では「北東部の石ころだらけで植物の乏しい地方」となっており、これもイマイチの語義記述だ。

ここは正確に語義を記すべきなので、「北東部の沿岸部熱帯季節林地帯と内陸部乾燥地帯の間に位置する中間漸移地帯」と修正した次第である。

■ 雑感その5：同じ単語でも地方によって意味が違う

一例だけあげると、granja。ブラジル南部では養鶏場の意味だが、北東部では、郊外の別荘地を意味する。私自身の経験でも、南部の養鶏場を訪問した時は、granja＝養鶏場と理解し、レシーフェやナタールの中産階層のブラジル人と会話した時は、彼らの別荘地という意味で頻繁に使われていた。プログレッシブ辞典も改訂版を出す時は、是非ともこうした地方でよく使われる語義も加えてほしいものだ。

というように雑感を列記していくと、その10どころか、その100くらいまでいきそうなので、今回は、これにて駄文を終わらせたい。乱筆乱文にて失礼しました。